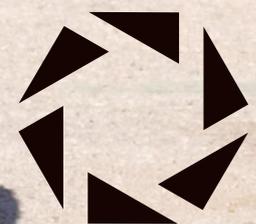


ANNUAL REPORT 2022



Dialogue for People

「いただいた」 出会いや言葉を 分かち合っていく



久々に長期での海外取材に繰り出した2022年。ウクライナやその周辺国で触れたマイノリティの人々の声、中東の取材先での久しぶりの再会、そして念願叶い韓国で親族との対面を果たした安田菜津紀の「ルーツを巡る旅」。あらためて、様々な出会いや言葉を「いただく」ことから、この活動が成り立っていることを実感した1年でした。

戦禍や差別の中を生きる人々の声、社会で起こる出来事の構造的な問題——より一層取材を重ね、この社会に届けなければならないことが尽きませんが、みなさまと一緒に、新たな年度も真摯に歩んでいけましたら幸いです。



認定NPO法人
Dialogue for People (D4P)
代表理事

佐藤 慧



ウクライナ東部の戦禍から家族と一緒に逃れてきたローラさん。母親は爆撃の影響により亡くなったという。
(ウクライナ、2022年/佐藤慧)



安田の「ルーツを巡る旅」の途中で、釜山の峨帽洞(アミドン)という街で出会った女性たち。
(韓国、2022年/安田菜津紀)



2019年、シリア北東部の自宅前で砲撃に遭い、右脚を失ったサラさん(左)。現在は隣国イラクで義足を使い学校に通っている。
(イラク、2022年/安田菜津紀)



ウクライナ出身、ポーランドの大学で学ぶスタニスワヴさんは、「社会は少しずつ性の多様性を認める方向に変わっている」と語る。
(ポーランド、2022年/安田菜津紀)

ウクライナ(軍事侵攻)



ロシアによるウクライナへの軍事侵攻から1年以上の月日が経ちました。ウクライナ各地では熾烈な戦闘が続き、故郷を追われる人々も増え続けています。D4Pでは、首都キーウとその近郊、プチャヤイルピン、ポロディアンカといった地域での被害の実態や、人々の証言を取材・発信してきました。

ウクライナ(マイノリティ)



ウクライナでは、軍事侵攻の影で「人種差別」に直面する人々もいます。少数民族ロマは、数百年という歴史の中で、ヨーロッパ各地を移動する生活を続け、その土地土地で差別や迫害の対象となってきました。ウクライナやその周辺国におけるロマの人々の置かれた状況や、アップデートの必要な人権意識について取材しました。

ルーツを巡る旅



わずかな書類を頼りに始まった安田の「ルーツを巡る旅」は、いよいよ海を越え韓国へ。隣国でありつつ、ここ2年はコロナ禍に渡航を阻まれていました。安田の家族のルーツと共に、朝鮮半島の歴史や、戦争・植民地支配に翻弄される一人ひとりの存在が浮かび上がってきます。現代日本社会にも通じる、根深い家父長制とも向き合いました。

加害の歴史をみつめる



1945年8月15日——日本では「終戦」あるいは「敗戦」の日として記憶されている日付ですが、朝鮮半島では「日本の植民地支配から解放された日」として刻まれています。「最終決戦」に備え、特攻兵器の配備されていた済州島や、「韓国の広島」とも呼ばれる陝川(ハプチョン)を訪れました。

性の多様性



レインボープライドなど、性の多様性に関する様々な取り組みが世界各地で広がる一方、社会的性差に基づく差別や暴力はまだまだ多く存在します。イラク北部クルド自治区では、多様な性の在り方を「家族の恥」とする「名誉殺人」の背景を取材しました。マイノリティとして生きるハワールさんは「これは人と人とのつながりの話、人権の問題」なのだと言います。

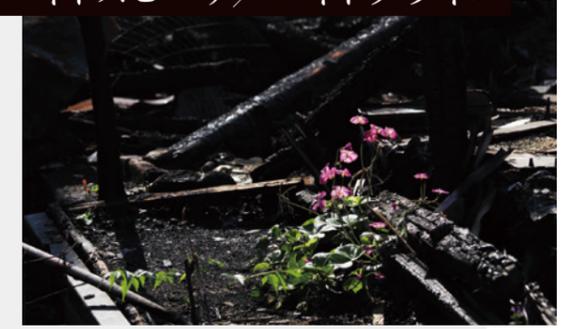
REPORTING THEME IN 2022

2022年度の主な取材テーマ

このほかにも、人権に基いた様々な社会問題の取材を行っております。ぜひウェブサイトからご覧ください。



ヘイトスピーチ/ヘイトクライム



2016年、ヘイトスピーチ解消法が制定され、自治体レベルでは刑事罰付きのヘイトスピーチ禁止条例が制定されるなど、差別発言に関する社会制度は少しずつ改善されていますが、京都府宇治市ウトロ地区での放火事件など、深刻なヘイトクライムが相次いでいます。誰もが向き合うべき「差別の問題」であるということ、引き続き発信していきます。

イラク・シリア



イラク北部クルド自治区やシリア北東部など、これまで取材を続けてきた地も再訪しました。世界中の注目がウクライナに集まる中、イラク・シリアなどでの長年の戦禍に疲弊する人々の避難生活は、より過酷なものへと追いやられていました。「情報の格差」が「命の格差」とならないよう、丁寧な取材を続けていきます。

現地取材パートナーからの声



2022年8月5日、イスラエル軍はパレスチナ自治区ガザ地区への空爆を開始。前年に引き続き、「対テロ作戦」という名目のもと多くの一般市民が犠牲となりました。D4Pでは、現地取材パートナーのアイサールさんからの緊急レポートのほか、アマールさんからのメッセージなどを届けました。

死者の尊厳



福島県大熊町で娘の汐凧(ゆうな)さんの遺骨捜索を続ける木村紀夫さんは、沖縄で戦没者の遺骨収集を行う具志堅隆松さんとの出会いを通じ、「慰霊」や「祈り」の意味、そしてそれを「継承」していくことの大切さを考え続けてきました。2022年4月、木村さんは沖縄を再訪——「沖縄戦の歴史」や、そこから続く「沖縄の今」に触れました。

入管収容問題



入管による人権侵害が続いています。各国の人権状況を審査している「国連自由権規約委員会」は日本への勧告を公表し、収容施設の改善や、国際基準にもとづく独立した人権救済機関を創設するよう求めています。前向きな動きは見られません。2021年3月6日、名古屋入管で亡くなった、スリランカ出身のウィシユマ・サンダマリさんの国賠訴訟も継続中です。



REPORT OF UKRAINE

「人権」という確かな灯火を

写真・文 佐藤慧



無残に破壊された住宅街



PHOTOS

【写真左】キーウから60キロほど離れたポロディアンカでは、大規模な破壊の跡が目立った。一部が完全に破壊された集合住宅。

【写真右上】ポロディアンカの目抜き通りの店舗が、執拗なまでに破壊されていた。「わざわざ建物の前で戦車をとめて、一軒一軒破壊していった」。

【写真右下】ブチャの街外れに、破壊された車や軍事車両が集積されていた。犠牲となった市民の髪の毛が残されたままの車両も。

被害の実態を伝えるために、凄惨な描写や性被害について触れている箇所がありますので、お気を付けください。

2022年5月中旬、ポーランド、ワルシャワから出発した夜行バスに乗ること15時間を経て、バスはキーウ市内へと到着した。早朝の静かな空気と澄んだ青空は、ここが戦禍に晒されている地であることを感じさせない。つい週間ほど前までは、あまり人も出歩い

ていなかったと地元の方が教えてくれたが、徐々に陽が高くなるキーウ市内では、多くの若者や女性が、普段と変わらない日常を過ごしている様子があちこちで目についた。時々うなるように鳴り響くサイレンは空襲警報だが、あまりにも頻繁に繰り返されるので、多くの人は気にも留めない。けれど、所々に設置されたバリケードや、いざという時はシェルターとしても活用される、地下鉄構内へと続く入口に積まれた土塵を見ると、やはり「戦時下」なのだと思う

い知らされる。市内の丘に悠々とそびえる聖ミハイル黄金ドーム修道院前の壁には、2014年以降、ウクライナ東部で犠牲になった兵士たちの顔写真が並んでおり、今回の侵攻が突発的・一時的なものではなく、常に続いてきた緊張状態の延長線上にあるものだということが見て取れる。

無残に破壊された住宅街

そんな日常と戦時下の交錯する市内から、北西約20キロほどのとこ

ろにある街、イルピンは、ロシア軍のキーウ侵攻に歯止めをかけるために、激しい戦禍に晒された地のひとつだ。侵攻前は約6万人が居住していたが、戦闘が激しくなるに連れ、数万人の市民が避難せざるを得なかった。その後ウクライナ軍により奪還されたが、300人以上の市民が犠牲になったとみられており、調査が続いている。

イルピンを訪れた日は、5月だというのに異常なほど気温が低く、小雨の中を歩いていると、手がかじ

かんでくるほどだった。イルピンとキーウを繋ぐ橋は、ロシア軍により破壊されており、避難する人々は徒歩での渡河を余儀なくされた。キーウで働く人々のベッドタウンだったという、多くの住宅街が続く地域に差し掛かると、目につく住宅のほとんどに砲弾の直撃した跡が残っている。車を降りて、ひときわ損傷の目立つ集合住宅に近づくと、いまだにひどく焦げ臭いにおいが漂ってきた。瓦礫の散らばる入口から階段へと歩いていくと、ひしゃげたドアから、

ちょうど人影が出てきたところだった。イヴァンさんという初老の男性は、息子のアレクシーさんと一緒に、破壊された自宅の後片付けへと戻ってきたところだという。部屋の瓦礫をかきわけていたアレクシーさんは、「ウクライナ東部ではずっと戦争が続いていました。いつかはこうしたことが起きるのではないかと考えていましたが、このように市民を標的とした攻撃が起こるとまでは予想していませんでした」と語る。「もうここには住めません。妻と子ども

「たちも今はスロヴァキアに避難しています」。

悲痛な証言の物語る戦争

街中で出会ったアレクサンドラさんは、第二次世界大戦を経験しており、戦時下を生きるのはこれが2度目だという。第二次世界大戦中、ウクライナは旧ソ連軍とドイツ軍とが衝突する激戦地となり、数百万人が犠牲となっている。そ

んなアレクサンドラさんは、今回の侵攻でも目を覆いたくなるような惨事に直面することになる。「ロシア軍がやってきて、私の家を占拠しました。スナイパーたちが屋根に陣取り、親しい隣人たちが次々と殺していったのです」。そう語る彼女の腕は、当時の恐怖がよみがえってきたのか、小刻みに震えていた。「わざわざ日本から来てくれてありがとう」と、アレクサンドラさんは涙をふき、杖を

突きながら、解放された自宅へと帰っていった。

イルピンから数キロ離れたブチャという街では、ロシアの侵攻により、400人以上の市民が殺害されたとみられている。生存者の証言からは、耳を塞ぎたくなるような凄惨な拷問や、性暴力の様子が浮かび上がってくる。イルピンからブチャへと続く道路脇でお話を伺った男性、イルヘニ・ジェー

ニャさんは、ブチャ近郊のボルゼルという街に暮らしていた。医師であるジェーニャさんは、侵攻中も現地に留まり、政府の支援の届かない地で人々を支え続けてきた。「ロシア軍の兵士たちは、我々の家から何もかも強奪していった。貴重品以外にも、家具や衣類、下着まで、やつらのベースキャンプとなっていた森へと運び込んでいった。あるひとりの男性は、兵士たちの集団にレイプされ

た挙句、翌朝自殺してしまったんだ」と、ジェーニャさんは声を震わせながら語った。

「人権」という確かな灯火を

この原稿を執筆している現在、状況は混迷を極めている。大国の思惑が、まるでチェスのように各地で衝突し、様々な利害をめくり、世界大戦の様相を見せ始めている。しかし、どのような大義

名分があろうとも、戦火が人々の日常を焼き尽くし続けていることに変わりはない。数字の多寡では測れない大切なものが、日々この世界のどこかで、「戦争」という愚かな行為のために失われている。21世紀を迎えて久しいが、人類はまた「戦争の世紀」を繰り返すのだろうか。「人権」という確かな灯火のもとに、次世代に継承する世界について、一人ひとりが考えていかなければならないだろう。



悲痛な証言の物語る戦争

PHOTOS

【写真左】破壊の爪痕の残る建物に囲まれた広場では、人々が青空市場を開催していた。「綺麗な花が咲くのよ」と、種を売る女性。

【写真右上】凄惨な虐殺があったとされるブチャでは、犠牲となった兵士の遺体の埋葬が行われていた。

【写真右下】イルピンの集合住宅。明らかに一般市民の住宅だとわかる建物がことごとく破壊されていた。

WEBSITE D4Pウェブサイト

紛争地や被災地の取材レポート、エッセイや時事問題など、幅広い記事を執筆しています。

2022年度に最も読まれた記事



閣議決定とはそもそも何か？

その濫用は「法の支配」を蔑ろにし
「人の支配」を生む
高安健将さんインタビュー



2022/8/30公開

2022年度に最も読まれたエッセイ



出自について

議員による差別が各地で問題となっています。こちらでは、東京都のある区議による差別の問題と、その責任について書いています。



2022/7/27公開

特設WEBギャラリー



Since3.11

“東日本大震災から〇年”——毎年3月が近づくと、そんな言葉をよく耳にします。これまでの取材を、写真と共に振り返りました。



2022/3/2公開

FREE MAGAZINE フリーマガジン「VOICE OF LIFE」

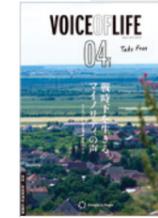
2022年度は Vol.3、Vol.4を刊行しました。



Vol.3

故郷を追われる人々

誰しもが、自分らしく生きていける居場所を
故郷・ベトナムを離れて日本で難民認定を受けた南雅和さん、家族で日本に住むロヒンギャのカディサ・ベゴムさんへのインタビューレポートをお届けします。



Vol.4

戦時下を生きるマイノリティの声 ウクライナ・周辺国現地取材から

ウクライナや周辺国で出会ったマイノリティの人々への取材レポート。数世紀にわたり差別を受けてきたロマの住民、性的マイノリティの人々が置かれている状況とは――。

BOOK 書籍

2022年度は3冊の本を執筆しました。



あなたのルーツを 教えてください

安田菜津紀 著
左右社 1,980円(税込)
2022年2月15日発売



外国人差別の 現場

安田浩一、安田菜津紀 著
朝日新聞出版 935円(税込)
2022年6月13日発売



隣人のあなた 「移民社会」日本では いま起きていること

安田菜津紀 著
岩波書店 638円(税込)
2022年11月10日発売

さまざまな形で「伝え」「届け」ました。

YOUTUBE YouTube動画配信

独自の取材映像や解説動画など幅広く展開しています。



Chiki's Talk

評論家荻上チキ氏が、様々な社会問題やメディア論の概念などを取り上げ、独自の視点で分析し、分かりやすく解説します。



カルチャーから知る朝鮮半島のこと

トークや街歩き、祈念館訪問などを通して、朝鮮半島や、そこにルーツを持つ人々の文化への理解を広げていくシリーズです。



From KITCHEN to the WORLD

スリランカの激辛豆料理や中東のひよこ豆スープなど、世界各地の素敵な料理を、是非一緒につくって(食べて)みましょう！



Radio Dialogue

時事ニュースや取材報告、日々を生きるヒントとなる様々なテーマに関する音声番組を、ゲストと共に配信中。毎週水曜日夜9時～。

2022年度 最も聞かれたRadio Dialogue

青木理さん「安倍政権とは何だったのか」

Radio Dialogue 068 2022/7/20公開



連載

2014年4月～	CAPA(ワン・パブリッシング) 「ドキュメンタリー写真家のメッセージ」
2017年3月～	みんなのねがい(全国障害者問題研究会)写真提供
2019年10月～2022年11月	サンガ(東本願寺真宗会館)連載
2020年1月～2022年12月	中日新聞「EYES」
2020年4月～	WOWOW 公式 note「シネピック」
2020年4月～2022年3月	論座(朝日新聞社)「あなたのルーツを教えてください」
2021年3月～	月刊「ヒューマンライツ」(部落解放・人権研究所) 「言葉と写真で世界をみつめる」
2021年5月～	生活と自治(生活クラブ連合会)「対話する日々の中で」
2021年8月～	政治プレミア(毎日新聞)連載
2022年2月～	沖縄タイムス 連載

レギュラー出演番組

TBSテレビ「サンデーモーニング」コメンテーター	月1回～
Amazon Exclusive「JAM THE WORLD - UP CLOSE」	週1回～

数字で見る

D4PWeb記事	52本
YouTube動画	88本
講演	115件
出演	92回
執筆	141件
インタビュー/対談	38件
撮影/写真提供	10件
写真展	6件
自主イベント開催	2回
出版関連	3冊
フリーマガジン刊行	2件

若手発信者

育成事業

次世代と共に歩む

社会課題を発信し、それぞれの立場から社会のアップデートを続けていくことに終わりはありません。今を生きる私たちだけではなく、未来を担う世代へのバトンを継承していくことも、Dialogue for Peopleの事業の軸のひとつです。



東北オンラインスタディツアー2022

震災から11年。繋ごう、記憶と教訓のバトン

2014年から毎年夏に行ってきた「東北スタディツアー」。全国の高校生約10名が安田菜津紀と共に、東日本大震災の被災地を訪れ、現地の方と出会い、写真を通じて交流を深めてきました。ところが新型コロナウイルスの感染拡大により、昨年に引き続き、2022年度もオンラインでの開催となりました。本プログラムでは、安田菜津紀の司会・進行のもと、東日本大震災の被災地(岩手県陸前高田市・宮城県石巻市・福島県富岡町)とオンラインでつなぎ、「東北の今」について、それぞれの地域の語り部の方からお話を伺います。その後、参加者同士で意見・感想などをシェアしながら、これからどのような防災に取り組みたいかなど、東日本大震災の教訓から、未来へ繋がる防災を学んでいきます。40名の中高大学生世代の方々が、日本各地、海外から参加しました。

参加者から多くあった声としては、「実際に話を伺うことで、報道ではなかなか見えない東北の街の様子、そこにいる方々の姿を知ることができた」というものや、「これまで、被災者に向けられる『かわいそう』と

いう視線を、どう解釈したらいいか分からなかった。しかし、今回のスタディツアーを通じて、東北のことを伝えたいと思っている方が多くいることを初めて知った。これからは積極的にお話を伺い、現地にも足を運びたい」という感想などをいただきました。

登壇者



佐藤一男さん
岩手県陸前高田市



佐藤あかりさん
岩手県陸前高田市



佐藤敏郎さん
宮城県石巻市



秋元菜々美さん
福島県富岡町

協賛 オリンパス株式会社

協力 OMデジタルソリューションズ株式会社
生活協同組合バルシステム東京

READ THIS REPORT ON THE WEBSITE

Webサイトでレポートを読む



D4Pメディア発信者集中講座2022(全3回)

若者世代(18~25歳)を対象に、「伝える」ことについて考えるイベント。2022年夏、昨年に続き2度目の開催。

私たちは、日々発信され続けるニュースを通じて、世界の「今」を知ることができます。また、SNSなど気軽なツールを使い、自分たちでも発信を行っています。ニュースは、政界や芸能界など、自分とは接点のない著名人の最新情報や、社会問題のリアルなど、私たちが世の中を知るためのひとつの重要な情報源です。一方で、報じられ方によっては、誰かが傷ついたり、心が苦しくなったりすることもあります。

誰もがメディアに触れ、そしてメディアになりえる今、「伝える」ことの意味や影響、可能性について改めて考える—社会課題に近い立場で、その背景や思いを「伝える」活動が続ける講師陣からの講義や、参加者同士の交流の時間を通じて、23名の受講者の方々と共に、学びを深める時間を過ごしました。また参加者には、2日間の講座を踏まえて、自身の気になるテーマについて、それを他者に「伝える」作品(文章・写真・映像など自身が最適だと思う表現方法によるもの/課題提出が難しい場合は、講座のレポート)を提出いただきました。

講座1



メディアとは?
講師: 荻上チキさん(評論家)

講座2



視覚と聴覚で伝える映像ジャーナリズムの魅力
講師: 伊藤詩織さん(ビデオジャーナリスト)

講座3



取材は「いただきもの」
講師: 安田菜津紀

講座4



ヘイトスピーチと報道
講師: 網岡康子さん(弁護士)

講座5



性暴力に関する報道について—被害者バッシングとタブー化の過去
講師: 小川たまかさん(ライター)

講座6



表現方法の選択/取材される側の視点/課題提出に関して
講師: 佐藤 健

対話



シェアリングタイム
担当: 徳田太郎さん(ファシリテーター)

READ THIS REPORT ON THE WEBSITE

Webサイトでレポートを読む



会計報告

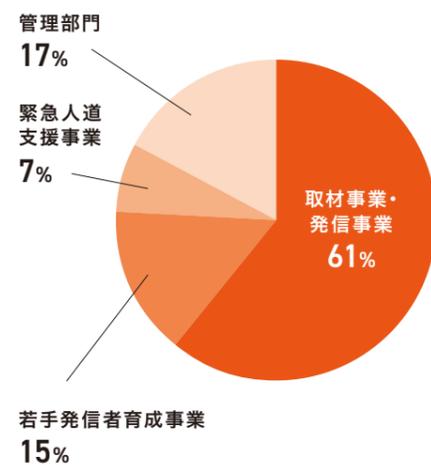
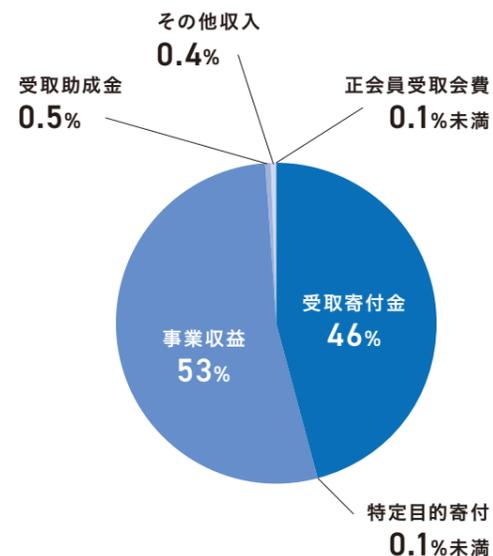
収入の部	
項目	金額(単位:円)
正会員受取会費	42,000
受取寄付金	29,760,045
特定目的寄付	35,000
事業収益	34,861,692
受取助成金	305,657
その他収入	253,893
経常収益計	65,258,287

支出の部	
項目	金額(単位:円)
取材事業・発信事業	33,903,739
若手発信者育成事業	8,322,078
緊急人道支援事業	3,748,255
管理部門	9,570,561
経常費用計	55,544,633

私共は、特定非営利活動法人Dialogue for Peopleの2022年度(2022年2月1日から2023年1月31日)の業務監査及び会計監査を行い、その結果、業務が適正に執行されており、会計について証拠書類及び関係書類は、記載すべき事項を正しく記載し、また支出すべて領収書等の証憑と合致していることを認め、ここに報告いたします。

2023年4月6日

※活動報告書および財務諸表の全体はDialogue for Peopleウェブサイトにてご確認いただけます。 <https://d4p.world/about/>



監事 石井宏明 

監事 潤間拓郎 

支援者のみなさんの声



福井 周さん

人ひとりで知ることができる情報は限られていると感じる毎日です。私自身、情報のアップデートには努めているつもりです。また、困窮者支援にも関わっているので、肌で感じていることも比較的多いかもしれません。でも、知れば知るほど、もっと知られるべきことがあるのだろうと気づかされます。複合的な困難を強いられ、交差的に周縁化されているマイノリティの実態を誠実に伝えてくれるD4Pの発信は、私が抗うための一つの足がかりです。



中島 京子さん

毎日のように、たいへんなこと、見逃せないことが起きているのに、気づかなかったり、よくわからないままに放置していたりする情報のなんと多いことか。頼りになるメディアを持つことのたいせつさを日々感じています。D4Pのフットワークの良さ、テーマのセレクト、だいじなことを伝えてくれる発信力、そして、小さな声も丁寧に届けようとする姿勢を、信頼しています。サポートしたい!と思わせてくれるメディアです。



松下 智子さん

D4Pの皆さんは、世界中を飛び回って、当事者やご遺族と共に汗を流し語り合い、ひとりひとりの人生にじっくり向き合う取材をされています。その姿勢に、「すべての人がかけがえのない一人、私もあなたも、かけがえのない存在なのだ」というメッセージをいただいている気がして、私自身も救われています。若い方々の育成に力をいれていることも、素晴らしいです。D4Pの思いが、未来に繋がり、広がっていきますように。

組織概要

名称	特定非営利活動法人Dialogue for People (ダイアログ フォー ピーブル)
所在地	〒165-0026 東京都中野区新井2-10-3 KSビル202
設立	2019年3月23日
法人格取得	2019年5月22日
認定取得	2022年1月7日 有効期間:2022年1月7日から2027年1月6日まで 番号:3生都管第1069号

代表理事	佐藤 慧 / D4P事務局員
副代表理事	安田 菜津紀 / D4P事務局員 中山 大輔 / D4P事務局員
理事	石川 梵 / 写真家・映画監督 小澤 いぶき / 児童精神科医 在間 文康 / 弁護士
監事	石井 宏明 / 団体職員 潤間 拓郎 / 行政書士
事務局 スタッフ (2022年度)	有給職員:のべ5名 インターン:のべ16名

ご支援のお願い

「伝える」を「支える」ことから、 世界と「つながる」

国内外の取材、記事や動画の発信、自主企画の運営などのDialogue for Peopleの活動は、みなさまからのご寄付に支えられています。境界線を越えた平和な世界を目指すための、「伝える活動」へのご支援・ご協力をよろしくお願いします。

ご寄付のお申込みはウェブサイトから

月々3,000円から始められる
マンスリーサポーター募集中!

Dialogue for Peopleは「認定NPO法人」です。
ご寄付は税控除の対象となります。

<https://d4p.world/donate/>

